

2020（令和2）年度 福岡女子大学 帰国生特別入試

〔 試験問題 〕

国際教養学科

総合問題

【 90 分 】

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題は4ページから15ページにあります。問題は問一から問九まであります。
- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 4 試験開始と同時に解答用紙の**受験番号欄**に**受験番号**を記入してください。
- 5 試験終了後、**問題冊子は持ち帰ってください**。

問題 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

歴史書と歴史小説のちがいの存否を考えるには、両者をもう少ししっかりと対比させながら、さらに詳細に分析する必要がありそうです。

ここでは、例として、イ紀元一世紀末に始まり、古代ローマの全盛期とみなされている五賢帝時代をめぐる^① 叙述について、古代ローマ史家である南川高志の^(a) □になる^② ケイモウ的な歴史書『ローマ五賢帝』(以下、『五賢帝』)と『物語』^{注一}とをくらべてみましょう。

古代ローマは長いこと共和制でしたが、紀元前一世紀末の混乱を経て帝制に^③ イコウします。ところが、その後、帝制は、暴君あり、皇帝暗殺ありという、山あり^(b) □ありの経過をたどります。ようやく混乱が収まったのは一世紀末のこと、ネルウア(ネルヴァ)が帝位についてからのことでした。彼から、トラヤヌス(トラリアヌス)、ハドリアヌス、アントニヌス・ピウスを経て、二世紀末のマルクス・アウレリウスに至る五代の皇帝のもとで、古代ローマは安定と^④ ハンエイのピークを迎えることになります。彼らが「五賢帝」、彼らの時代が「五賢帝時代」です。

五賢帝をめぐる二冊の本を読んで感じるのは、『物語』はすらすらと読み進めることができるのに、^ロ『五賢帝』を読んでいると、あちらこちらでなんとなくつつかえたり、つまずいたりしてしまうことです。これは文体のちがいか、というところ、そうではなく、文体はさほど変わりません。

両者のちがいの原因を探るため、ネルウアからトラヤヌスへの皇位継承をめぐる叙述をみてみましょう。この継

承は、前者が後者を養子にするというやり方でなされましたが、両者のあいだに^⑤ケツエン関係はなく、また、当時、トラヤヌスはいわば^⑥ムメイの新人でした。

では、ネルウアが彼を養子に選んだ理由はなんだったのでしょうか。

まず、『物語』は、ネルウアは「自分一人で決めるほうを選んだようである」(塩野「a」^{注一}第九卷二七ページ)と記します。要するに、理由はわからないということです。たしかに、ネルウアの決心の理由を明らかにする史料は存在しませんから、本当の理由はわかりません。

ただし、その場合でも、ではなぜ「自分一人で決めるほうを選んだようである」と推測できるのか、その根拠を示す必要はあるはずです。推測だということを示したうえであれば、何をいつてもよい、というわけではないはずです。ちよつと疑問が残ります。

次に南川を見ると、彼はあきらめることなく、トラヤヌスの政治力を重視する通説を批判したうえで、さまざまな史料を探し出し、読み込み、比較してゆきます。そして、皇位継承の背景には二つの^⑦セイリヨクの対立があり、その決着がついたことよつてトラヤヌスが養子に選ばれた、という仮説を提示します。その論証の^⑧カテイはともスリリングだし、この仮説はなかなか説得的です(南川「a」^{注二}二六三〜八〇ページ)。

ここから、『五賢帝』を読むときにつつかえる感じがする理由がわかります。それは、この本が、論を進めるにあたって、史料や先行する諸説(先行研究)を批判的に検討するという作業をいちいち経ていることです。

たとえば、ネルウアが比較的高齢の政治家を登用した理由は何か、トラヤヌスがダキア(現ルーマニア)に遠征

した理由は何か、「ブルトウスの自由」という^⑧メイの入った貨幣を発行した理由は何か、ハドリアヌスがトラヤヌスのあとを継いだ理由は何か——こういった問題を扱うにあたって、南川はまず史料や先行研究を「本当か」と疑い、それらをほかの史料や諸説と突き合わせたうえで、ようやく自分の諸説を提示します。これがつかえた感じを与える原因であり、また、『物語』には見られない『五賢帝』の特徴です。

もちろん、『物語』も、史料や先行する諸説をすべて無批判に受け入れているわけではありません。そのことは、

「調査研究の必要度ならば学者も作家も差はないのだが、それに取り組む姿勢となると、学者と作家とは違うように思う。そのちがいを一言で片づけければ、学者には史料を信ずる傾向が強いが、作家は、史料があってもそれらを頭からは信じない、としてよいかと思う」（塩野「a」^{注1}第八卷三三〇ページ）

という文章を見れば明らかでしょう。

もつとも、これでは、史料を疑うことにかけては歴史小説家のほうが一枚上手だ、といわんばかりですが、ぼくにいわせれば、これは歴史家の営みを知らないことを告白しているようなものです。

もちろん、史料を疑うことについて、歴史小説家と歴史家のどちらが上手かという問題は、ここでは大切ではありません。問題は、史料や先行研究の疑い方にあります。

史料や先行研究を疑うに際して、先に述べたように『五賢帝』はほかの史料や先行研究にもとづきません。では、

『物語』はどうかというところ、「ではないだろうか」とか「印象づけられてしまった」といった文言が多用されていることからわかるように、最終的には塩野の実感にもとづいています。これが二冊の本のちがいであり、さらには歴史小説と歴史書のちがいです。

歴史小説では、最終的な判断を著者の実感にもとづかせることが認められています。ですから、歴史小説では、筆者である小説家は想像の^⑩ツバサを広げられます。これが歴史小説のメリットです。その一方では、いくら史料や先行研究を利用し、叙述のみならず分析を加えていても、記述の信憑性^{しんぴようせい}に疑いが残ってしまいます。これが歴史小説の小説たる所以^{ゆえん}です。あるいは限界といってもよいでしょう。そして『物語』も、この点から見ると、やはり一つの歴史小説です。

これに対して歴史書は、あくまでも史料や先行研究のなかで、それを根拠に考察を進めます。そして、根拠がない場合は、「わからない」と述べるか、あるいは「これはあくまでも仮説である」と断らなければなりません。これは歴史書の限界でもあり、いちばん基本的な特徴でもあります。

いうまでもなく、歴史書を書く歴史家だって、すべてがわかっているわけではありません。ただし、根拠があることと、根拠がないことは、きちんと区別しなければなりません。そのうえで、根拠がないように見えることについて、ほかの史料や先行研究を読みなおし、新しい史料を探し、新しい解釈を考えることによって、本当に根拠がないと断定できるか否かを問いつづけなければなりません。自分が見つけられなくても、あとに続く歴史家が根拠を見つけるかもしれない、ということを考えて行動しなければなりません。

その意味では、歴史学はつねに現在進行形の営みであり、歴史家は「なぜと尋ね続けるところの動物」（カ
「a」^{注三}一二六ページ）です。これが歴史を学ぶという営みの中核、というか土台をなしています。

ちなみに、^ホ成田龍一は、これまた著名な歴史小説家である司馬遼太郎の作品を検討しつつ、「史実と仮構（フィクション）との関係」という視点から歴史書と歴史小説の異同を考えることは時代遅れであり、「ここから先を考えることが必要」だと主張しています。その根拠として彼があげているのは、「書きとめられたことが事実Vで、そこに載せられていないことは事実Vとしないというのでは、あまりに単純です」ということ、「文脈と立場によって出来事の意味は異なります」ということ、そして、「誰にとっての事実Vかということを考えないわけにはいかないことは多い」ということです（成田「a」^{注四}一六〇一七、四九ページ）。

ただし、成田があげる根拠だけにもとづいて「史実と仮構との関係」を軽視することには、かなり無理があります。とくに、歴史学が現在進行形の営みであり、また、そんな営みでしかない、という点を見落としているのは問題です。

では、そうすると、歴史書は、史料にあるかぎりの史実を用いるという意味で事実しか書いていないのでしょうか。たしかにそんな気がするし、また、それが歴史学の本質だといえそうです。とくに、歴史小説とくらべてみると……。

ただし、もうちょっと考えてみると、史料を書いたのは著者という人間だし、歴史書を書くのも著者という人間です。こんな史料にもとづくこんな歴史書に著者の実感が混入し、本当でないことが記されてしまう、という「可

能性はないのでしょうか。もうちよつとくわしく調べることが必要です。

(小田中直樹(二〇〇四)『歴史学ってなんだ?』PHP新書、三三―三九頁による)

注一 塩野七生『ローマ人の物語』のこと

注二 南川高志『ローマ五賢帝』のこと

注三 カー『歴史とは何か』のこと

注四 成田龍一『司馬遼太郎の幕末・明治』のこと

問一 傍線①～⑩の漢字はカタカナに、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 □(a)と(b)に当てはまる適切な漢字を一字はそれぞれ何か。

問三 傍線イの紀元1世紀末の時代及び古代ローマに関連する次の問いにそれぞれ答えよ。

(a)紀元前1世紀の古代ローマの内乱を収め、元老院からアウグストゥスの称号を受けてローマ帝国の初代皇帝となった人物は次のア～エのうち誰か。一つ選び記号で答えなさい。

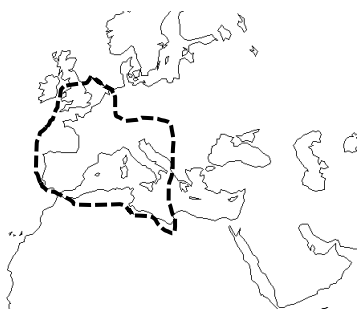
ア プリニウス イ オクタヴィアヌス ウ カエサル エ ネロ

(b)紀元1世紀末の古代ローマの領土で最も適切と思われるものはどれか。一つ選び記号で答えなさい。

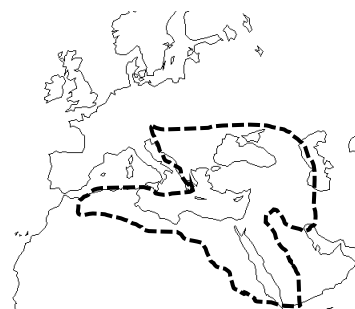
ア



ウ



イ



エ



(地図の出典

<http://www.craftmap.box-i.net/>)

(c) 紀元1世紀の東アジアの状況について、妥当な記述は次のア〜ウのうちどれか。

一つ選び記号で答えなさい。

ア 朝鮮半島では、百済が大きな勢力を有していた

イ 中国では、秦が倒され、後漢が成立した。

ウ 後漢の皇帝の光武帝から日本の倭国の王に金印が渡された。

問四 傍線ロで、筆者は、『五賢帝』を読んでいると、つかえたり、つまずいたりしてしまふとなぜ感じたのか。

その理由を五〇字程度で記述せよ。

問五 傍線ハの「史料や先行研究の疑い方」とあるが、『物語』と『五賢帝』の史料や先行研究の疑い方をそれぞれ簡潔に説明せよ。

問六 傍線ニの「歴史学はつねに現在進行形の営み」とは、どのような意味か。最も適切なものを次のア～エから一つ選び記号で答えなさい。

- ア 歴史学の研究が、継続的に出版されることによって進められていること。
- イ 歴史学の研究が、先行研究をもとにおこなわれていること。
- ウ 歴史学の研究が、根拠のない新しい解釈によっておこなわれていること。
- エ 歴史学の研究が、「なぜ」という原因を探求するものだから。

問七 傍線ホに関して、筆者は成田龍一の主張について、どのように考えているか。

問八 本文に関連する以下の問題について、答えよ。

(a) マルクス・アウレリウスの作品を次の中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 神の国
- イ ガリア戦記
- ウ 君主論
- エ 自省録
- オ 方法序説

(b)現在のルーマニアは次の①～④の中から一つ選び数字で答えなさい。



(地図の出典

<http://www.craftmap.box-i.net/>)

(c) 司馬遼太郎の作品の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 金閣寺

イ 塩狩峠

ウ 太陽の季節

エ 海と毒薬

オ 坂の上の雲

問九 傍線へで言及されている「可能性」について、どのように思うか。筆者の考えを取り上げながら四〇〇字以内であなたの意見を書きなさい。

